

白氏文集 四十九 九日登西原宴望

加藤淳平

白樂天故郷にあり。九月九日の重陽の日、親族の人たちと西の高原に登り景色を見て宴會を開く。

九日登西原宴望 九日西原に登りて宴望す

病愛枕席涼 病みては愛す 枕席の涼しきを

日高眠未輟 日高くして 眠り未だ輟めず

弟兄呼我起 弟兄 我を呼びて起こす

今日重陽節 今日 重陽節なりと

起登西原望 起ちて 西原に登り望めば

懷抱同一豁 懷抱 同一たび豁く

移座就菊叢 座を移して 菊叢に就き

餠酒前羅列 餠酒 前に羅列す

雖無絲與管 絲と管 無しと雖も

歌笑隨情發 歌笑 情に隨ひて發す

白日未及傾 白日 未だ傾くに及ばざるに

顔酡耳已熱 顔酡くして 耳已に熱す

酒酣四向望 酒酣はにして 四に向つて望めば

六合何空濶 六合何ぞ空濶たる

天地自久長 天地 自ら久しく長きも

斯人幾時活 斯の人 幾時か活きん

請看原下村 請ふ看よ 原下の村

村人死不歇 村人 死して歇まず

一村四十家 一村に 四十の家

哭葬無虛月 哭葬 虛月無し

指此各相勉 此れを指して 各の相ひ勉めに

良辰且歡悅 良辰なれば 且く歡悅せむ

(大意) 病氣になつて病床が涼しいことを嬉しく思ひ、朝、日が高く昇つてもまだ眠つてゐたが、弟や兄が私を呼び起して言ふ、「今日は重陽の節句だぞ」と。(舊曆九月九日の重陽の節句は、皆で高いところ昇つて祝ふ日なので) 起き上がつて、近くの西の高原に登つて(注・漢土の黄河高原には詩にあるやうな丘が多い)、景色を見ると、景色も自分の心の中の思ひも、一擧に豁然と開ける。菊の草むらのところに座を移して、餅や酒を前に並べる。琴のやうな弦を弾く樂器も、笛のやうな吹く樂器も無いが、感情が高まるにつれて歌と笑ひが起る。まだ晝間で日が西に傾いてもゐないのに、もう顔は赤く、耳は熱い。酒宴が酣はになり、四方を見渡すと、世界は何と涯しなく廣がつてゐることか。天地の自然は永遠に續くが、ここに居る人たちは、どのくらゐ生きられるだらうか。どうか見てもらいたい、高原の下の村を。あの村では次から次へと村人が死んで行く。四十の家がある一つの村で、一カ

月葬式の無い月はない。この村のことを考えて、皆それぞれ努めなければならないが、今日はめでたい日、今暫く楽しむこととしてよう。

(令和元年十二月六日受附)